

1. 誤解から入ったチョムスキーの生成文法理論

歯学部を卒業して2年程経った頃でした。勤務先の小室史郎先生の論文を英語に翻訳するお手伝いをさせていただいた時のことです。西光義弘先生（言語学；神戸外大）に接する機会に恵まれました。翻訳作業のかたわらに言語学のお話を伺ったのです。そのときの興奮を30年以上も経た今でも昨日のように思い出されます。

このとき、ソシュールやチョムスキーの名前を初めて耳にしました。「ソシュールは、例えば、この本のこの1ページに書かれている文章の文法を明確にしました。チョムスキーはその文章がどのように作り出されてくるかを明確にしました。」

幸か不幸か、私はこの説明を大きく誤解してしまいました。「なんと素晴らしいことだ。次から次へと言葉が繰り出されるメカニズムが学問になっている！ 表出されてしまった文章のメカニズムをソシュール的に解明するよりも、表出したい文章をどのように表出するかというメカニズムのほうがなんと重要だろう。」私は Generative を Creative と勘違いをして聞いたのでした。

私がこのように誤解をしたというのも、当時の歯科医としての私の悩みが関係していました。小室史郎先生は義歯作りの達人で、患者さんに応じて奇想天外な義歯形態と機能を与えて見事に患者さんの満足を得ておられました。歯の抜ける状態とか顎の形態は患者さん各人によって異なるわけですから、義歯もその形態や機能が患者さんに応じて異なるわけです。歯学部卒業したての私には、教科書的な製作から大きく逸脱しながらも結果として満足が得られる形態と機能を小室先生がどのように案出されるのかが分かりませんでした。義歯は奇想天外なものであっても、出来上がった結果を見る人にはどうしてこの部分はこの形態になっていて、あそこの部分の機能はなぜそのようになっているかのおおよその理由は分かりますし、分からない場合でも聞けばなるほどと納得ができるのです。問題は「どうしてそこに気が付いたか」です。私にとって表出されてしまった文の構造よりも、その構造を案出してくる小室先生の案出の構造のほうが重要だったのです。

「チョムスキーはその文がどのように作り出されてくるか」の文の意味が全く異なって私に取り込まれたのです。後になってこの誤解はチョムスキーへの失望を生じますが、言語学への一つの姿勢を形成してくれることになります。また、言語学は3つの大きな部門があって、言語の構造論・意味論・運用論がそれです。私にはそれらは義歯構造・義歯の意味・義歯の運用に聞き取れました。私たち歯科医師は構造論しか論議していない。運用・意味は全くの手付かず状態です。患者の立場で義歯装着の感じ方を歯科医師自身が考究することは学問としてはありませんでした。抽象的な運用・意味を言語学はどのように切り開いて行ったか。この点でも言語学は歯科医師である私には魅力ある学問に感じました。

2. 古代日本語は豊かなしゃべり言葉だった

ヘレン・ケラーの「Water」という文字の目覚め（すべてのものには言葉が付いていることの気付き）は感動的ですが、誰にも言葉の目覚めの時期はあろうかと思えます。何故、空を「そら」と発音する言葉を当てるのだろうかとかです。私は「淡雪：あわゆき」という言葉が好きで、その言葉を持つ日本に生まれて幸せを感じたときに言葉の目覚めであったと思えます。「あわゆ

き」は普通の和英の辞書にはないですし、研究社の大英和辞典には「あわゆき：soft snow」とあります。「タンセツ」でも「soft snow」でもない「あわゆき」の響きが好きなのです。あわゆきは決して新しい言葉ではなく、万葉集には「沫雪：あわゆき」として15首の歌が見えます。私としては万葉集の「あわゆき」が「淡雪」ではなく「沫雪」であるところが気懸かりなのですが、どちらにせよ「当て字」なのですからどちらでも構わないのです。私には当時の人たちが「あわゆき」と発音していたことが重要なのです。

古代日本は文字を持ちませんでした。しかし、口ずさむ和歌の制作は貴族のみならず大衆レベルを含めてあったようです。口ずさむ和歌の文字化が万葉集となったのです。私にとって興味あることは文字や文法ができてから万葉集ができたのではなく、文字や文法に先立ち言葉があったこと、しかもその言葉が和歌制作というとても心情豊かに表現できるレベルまでに完成されていたことです。

万葉集 巻1の29に次の歌が見えます。(塙書房 CDより)

本文：紫草能 / 尔保敝類妹乎 / 尔苦久有者 / 人孀故尔 / 吾戀目八方

訓み：むらさきの / にほへるいもを / にくくあらば / ひとづまゆゑに / あれこひめやも

訳文：紫の / にほへる妹を / 憎くあらば / 人妻故に / 我恋ひめやも

当て字の漢字にどのような音韻を与えるかで二行目の「訓み」ができるわけですが、時として漢字に意味があてがわれたり、意味とは関係なしに訓みとしての漢字が当て字として用いられています。（「紫」や「人」などの訓読みと当て字が混在しています。）これらのことは万葉集の編纂に先立ち既に漢字が使用されていたことを示すと共に漢字導入以前に文字ではなく言葉としてこのような和歌が制作できる程の表現システム（文法）があったことを示します。文字を持たぬ古代日本人が簡潔にして情緒豊かな言語による表現が可能なシステムを持っていたことに対して感嘆を覚えます。

微妙な心情表現に助動詞や助詞が重要な働きを示しています。口頭表現だからこそ文章表現よりも直接的かつ微妙な心情表現の達成に助動詞や助詞がおおらかに使えたに違いありません。

万葉集編纂には年代的には幅がありますが、基本的には万葉集は文字を前提にしない和歌表現と考えられます。ですから、万葉集は当時の人々がしたように、声に出して表現し、次の展開を待ち受けるように耳から聞き取らねばなりません。文字によらない情緒表現とはこのようにして達成されるからです。

3. 日本語が壊れていく

紫の / にほへる妹を / 憎くあらば / 人妻故に / 我恋ひめやも

この和歌を英語に翻訳する際に困難な部分は「我恋ひめやも」でしょう。助詞「や・も」が複雑な心情を表現しています。現代日本語の口語表現からは「恋ひめやも」は既に消滅してしまった語法ですが、万葉当時は日常の会話表現として実際にあったのでしょうか。それとも文語が存在しなかった万葉以前であっても、口語法以外に和歌を制作場合のみの語法としてあったのでしょうか。いわゆる教養人に限らない万葉作者の階層の広さを考えると「我恋ひめやも」は日常口語として使用されていたと思います。助動詞・助詞の豊富さは表現が簡潔にしてきめ細かな心情表現を可能にします。この助詞が消滅していくことは心情表現のきめ細

やかさが失われていくことを意味します。「や・も」を使用しないで「や・も」が表現したいところを達成するためには、文を増設するしかありません。しかも直裁的にです。しかし単なる直裁的増設では表現は達成できません。「我は恋するでしょうか。いやしない。」これでは和歌にならないと言うのではなく、これでは「しかし、この恋慕を抑えることができない」の真の表現ができなくなってしまう。増設は「我は恋するでしょうか。いやしない。しかし、この恋慕を抑えることができない。」にまで及ぶでしょう。それでも、言うに言われぬ躊躇の念まではまだ足りないのです。「や・も」は現代日本語にとっても翻訳不能な日本語と言えます。「やも」の2字はそのような広がりとお行きを持った語法です。このような語法が次第に消滅していきます。

表現手段を剥奪されたことに気が付かない若い年代が増えています。

「すっごく好き」

「かわいい」

「どうも どうも」

このような会話に、語法の不適切さを指摘しても逆に言葉に託された人情の無理解を指摘されるだけでしょう。もとより心情の機微は舌筆に尽くしがたいものですが、古代日本語は尽くしがたいからと言って限られた単語に万感を託して済ませることをせず、多様な語法を編み出したのでした。

現代日本語においては、最小限度の助動詞・助詞と最小限度の単語に向かう再編成が進んでいるようです。これは通時的な変化ではなく崩壊です。日本語の崩壊は悲しいことですし、相手の想像と推察に託す簡略語法は誤解が生じやすく表現を曖昧にする危険性があります。

豊かな言葉を育てるには「聞くこと」「読むこと」ですが、今日の社会ではメディアも含めて若い人たちに「聞いてもらえること」「読んでもらえること」自体が大変に困難なことになっています。面白くなければ「聞かない」「読まない」のですから、提供する側も成功者となるためにはより刺激的に、より安易にようになっていきます。視聴率と発行部数が最終目標になったときから日本語の崩壊は始まっているのです。それは既に日本語の崩壊ではなく、文化の崩壊なのです。

「読み・書き」を教えることだけが「国語」と考えている学生が少なくありません。さらには「日本語は既に知っているのに、どうして国語授業が必要なのだ」「国語学＝国語文法」「国語と哲学は別の学問」と思う学生もいるのです。国際化が進む昨今において、「英語の頭で考えよう。曖昧な日本語で考えるな」が叫ばれています。私はむしろ逆です。「情緒に向けた日本語の頭で考えよう。単純化に向けた英語で考えるな」。語法と同様に、考える姿勢が崩壊しつつあるからです。語法のワンパターン化崩壊は思考のワンパターン化崩壊を意味します。

「あわゆき」という美しい言葉を持ち、万葉歌を作り出した「素晴らしき語法」をこの若い世代に教えることは困難なことです。ましてや、自分だけの感じ方や考え方に気が付き、その表現を工夫することの苦しみと喜びを教えることは至難の業です。面白い面白くないかが講義の評価です。大学の講義や学問の世界にまで「売れてなんぼ」の状態になってしまいました。そういえば、書店では日本語についてのちょっとしたブームが生じています。「売れてなんぼ」のブームに終わらぬことを願うばかりです。

4. ソシュール理論の日本語への適応について

言葉は自分の考えとか事柄を他人に伝達する道具です。このことはどの言語についても言えることですから、どの言語にも共通する原則のようなものがあるのではないかと。ソシュールはこのような立場から一般言語学の礎を築きました。私もソシュールの『一般言語学講義』を読みました。その感想ですが、納得できるものではありませんでした。恐らく、素人の読後感です。理解ができていないところが大きく影響しているのだと思いますが、端的に言えばソシュールの『一般言語学講義』は西洋風土の産物であって、とてもその尺度では日本語は扱えないと感じました。

この感想は私が歯科医師で、「入れ歯」への西洋的発想と日本的発想との差異に苦しんでいた時期にソシュールを読んだことに関係しています。「義歯」は歯が抜けた部分に装着することによって咀嚼機能を回復する道具です。このことはどの患者さんについても、どの文化についても言えることですから、「義歯製作」にはどの患者さんにも共通する、また、西洋と東洋にも共通する原則のようなものがあるのではないかと考えることは自然なことでしょう。ソシュールが歯科医師であれば『一般義歯学講義』を書いたかもしれません。しかし、その発想では恐らく一番大事な部分が欠落してしまうでしょう。結論を言いますと、日本古来の義歯製作法(木彫りの義歯)は西洋のそれとは術式だけではなく、根底からの考え方が全く異なります。大げさに言えば、人間をどのように見るかという出発点からして異なっているのです。義歯学にあつては、西洋と東洋とに共通することを研究することから得られることよりも、その差異性を研究することによって得られるもののほうがはるかに大きいのです。日本の木彫りの義歯職人の関心は普遍的な義歯製作原理には向かず患者さん個人的な特殊性にどう立ち向かうかに向かいます。一方、西洋の義歯製作の関心は「Principle and Practise」に向かい当面の患者さんには原理をどのように応用するかと対応するのです。

一般言語学が何を対象にしようとしているかとも関連するのですが、対象を特異的な差異性に置くか一般的な共通性に置くかで結果は大きく異なってしまいます。東洋を知らないで西洋の中からの発想から出てきた共通原則論では、西洋にない東洋独特のものは欠落してしまうではありませんか。法隆寺建築を西洋建築学で、能を西洋演劇論で、東洋医学を西洋医学で強引に説明できないことはないでしょう。しかし、だからと言って西洋の理論だけで十分というわけにはいきません。西洋だけで押し切ることは西洋にとっても東洋にとっても不幸なことです。ソシュールは知らずして「西洋優越」というか「基準を西洋に置いてみれば」の姿勢で言語を見ています。

また、ソシュールは共時態を通時態に優先させていますが、これも西洋に身を置く彼の学問姿勢によるものでしょう。多様な言語を一般言語学として学問的俎上に乗せるためには共時態でないと処理できないからです。しかし、「どうしてフランス語はフランス語なのだ」は通時態を通してでないと明確にはなりません。万葉の語法は現在の日本語のものとは大きく異なっていますが、ひとたびヨーロッパ語と比較すれば、万葉の日本語の本質と今日の日本語の本質とは微塵も変化していないことが分かるでしょう。現代日本語を論議する場合に万葉歌を持ち出すことは決して見当はずれではないのです。もっとも、現在の国語学が西洋基盤の言語学に立脚しているために私の提案は見当はずれに見えるかもしれませんが。

5. 生成文法理論の日本語への適応について

義歯製作においても、他の技術同様に基本的な技術から高等な技術に進みますし、一つ一つの完全なプロセスの集積が最後の完全な完成を導きます。ですから、患者さんの型取りから義歯装着までのプロセスは気を抜くことが許されません。咬めない入れ歯は、どこかのプロセスに欠陥があることとなります。一つ一つのプロセスの技術の向上に努力することが歯科医の使命ということになります。恐らく、以上のことに間違いはなさそうにみえます。

しかし、ここには決定的な落とし穴があります。それは何かと質問されて 100 時間を与えられても、その落とし穴を指摘できる今日の歯科医はいないでしょう。日本の歯科医は西洋式の歯科学の考え方しか学んでいないからです。場面を言語に移すと、このことが明瞭になってきます。「基本を積み重ねて言語を習得したから全ての子供が完全にしゃべれるようになるのだ」というと、たちどころにそれはおかしいと分かるでしょう。

江戸時代の義歯職人の考え方は「Principle and Practise」よりも「習うより慣れよ」であり、「一つ一つのプロセスは完全ではない。だから、後続のプロセスが先立つプロセスの欠陥を修正するように進めなくてはいけない。」でした（私はこのスタイルを「後続補完思想」と呼んでいます）。西洋においては、義歯を製作して装着したときに痛くて咬めない入れ歯は失敗であり、修正は後始末でした。木彫りの入れ歯は、装着が終着ではなく、開始なのです。痛い部分の調節は後始末ではなく義歯製作そのものです。

生成文法理論は、表出されてしまった文を対象とした理論です。または、英語のように結論の先出し言語に相応しい文法理論です。一方、日本語のように結論の後出し言語では、主部が後に来るので大どんでん返しがあり、言葉の表出の途中では生成文法処理はできません。

君が好き
と言え、
君は驚くかもしれないが
周りの人が言うように
釣合いのカップル
ではないことは
分かっている。

この告白文を言語学的に見た場合に、生成文法処理はほとんど意味がないでしょう。どこの行で切っても何とでも後続文を変化させて繰り出していくことができるからです。相手を傷つけず、自分も傷つきたくない文の繰り出しです。実際の場面では英語でも何とでもなる後続文の繰り出しはできるでしょうが、日本語では自然にできる言語システムになっています。

上の例では「君が...」と切り出されたときは相手はまだ何のことか分からないわけです。「...好きだ」のところでは身構えますが「と言え」ときたので仮定上の話かと思えます。このように、話し手も聞き手も共々、状況しだいで一瞬先にどのような言葉が選択されるかは分からないわけです。ここに心理的な掛け合いや期待や作戦が生じます。これに文意を如何ようにでも修正する可能性を文の最後まで持ち続ける性質を備えた言葉が日本語なのです。しかし、時系列の中での表出ですから日本語の聞き取りないしは読み込みの時間差も文学的な特性としては楽しめるでしょう。

生成文法を日本語・ヨーロッパ語をはじめ全ての言語に対応させようとするに対応できる文にも限界が生じるでしょう。よしんば日本語に限っても全ての文に対応させようとする細部にわ

たる理論修正を余儀なくされ、理解不能な理論に墮してしまうでしょう。

6. 言語を超えて --- 東洋のまなざし

還暦を越えると歴史観が変化します。50年という単位は昨日のようです。レオナルド・ダ・ヴィンチは5日前の友人ですし、万葉歌人も2週間前の仲間です。1000年や2000年位で人間の理性や感性がそう大きく変化するとは思いません。以前の私は文字もない文化を馬鹿にしていたのですが、文字を持たない人々が現代の我々よりもはるかに情緒豊かで思慮深い文化を持っていたことを知りました。

もう40年も前のことです。大学時代に古代インカには紐（ひも）文字という表現様式があったと何かで知りました。文字とは言いますが、長い紐に所々に結び目があるだけの、要するに紐なわけです。無文字文化を馬鹿にしていた頃の私ですから、紐文字を馬鹿にしていたわけです。話は飛びますが、20才頃に横浜市鶴見の曹洞宗総持寺に座禅に通ったことがありました。そのときに、『従容録』がテキストに使用されました。テキストに使用されたといっても、口述の大半はテキストの解説と言うよりは、テキストは口述の目安ないしはきっかけであって、ほとんどテキストの内容からは離れたものでした。テキストの字句は難しく、解説もなく、何が書いてあるか分からないので質問にいきました。

「私の話を聞いていましたか」

「はい」

「私の話は分かりましたか」

「はい」

「では、それで良いのではないですか。字句にとらわれてはいけません。」

時期は異なりますが、同じことを「般若心経」や「正法眼蔵」でも経験しました。そこでは文字は伝達手段ではないのです。文の一つの段落は何かの表現の目安であり、サインとなっています。場合によっては、一冊の本ですら、その本に記述されたことは伝達したいことの万分の一であって、その本で表現したいことは記述されていることよりも奥のことなのかも知れません。「一冊の本ですら言いたいことのサインの一つでしかない」ことに気付いたとき、一冊の本とインカの紐文字の一つの結び目とが等価になっているかもしれないと思いました。

「行間を読め」と言われますが、行間にこそ伝達したいことがあるのです。

「古池や かわず飛び込む 水の音」の表現したいものは文字の中にはなく、「静寂」であ

ることはよくそれを表しているでしょう。言語学でもって文意を明晰にしようとするにはどうやら限界があるようです。

「言語とは何か」は言語学者の目標です。種々の立場から言語理論が追求されます。しかし、一つの理論であらゆる言語を説明できる訳がありません。どの言語理論が言語を一番よく説明するかではなく、言語学に挑戦する人の努力の仕方や気付きや情緒や人柄が言語の追求のスタイルを築くのです。言語研究の主戦場は机の上ではなく、言葉が行きかう巷の中にあります。どのようなフィールドからどのようなサンプルを何に啓発されて拾い出してくるかが面白いのです。

さて、話を歯科に戻しましょう・

「義歯とは何か」は歯科医師の目標です。種々の立場から義歯理論が追求されます。しかし、一つの理論であらゆる患者さんに適応できる義歯製作ができる訳がありません。どの義歯理論が一番よい義歯が作れるかではなく、義歯に挑戦する歯科医師の努力の仕方や気付きや情緒や人柄が義歯製作のスタイルを築くのです。義歯研究の主戦場は机の上ではなく、患者さんの口の中にあります。どのような症例からどのような体験を、何に啓発されて拾い出してくるかが面白いのです。

2004.8.14

おわり

3. 「当て字」言語論

万葉集 卷2の95を見てみましょう。

吾者毛也 / 安見兒得有 / 皆人乃 / 得難尔為云 / 安見兒衣多利

われはもや / やすみこえたり / みなひとの / えかてにすといふ / やすみこえたり

我はもや / 安見兒得たり / 皆人の / 得かてにすといふ / 安見兒得たり

鎌足はよほど嬉しかったのでしょう。「安見兒得たり」を二度も繰り返しています。しかし、この訳文「安見兒得たり」だけでは読み取れない嬉しさが原文には出ています。最初の「安見兒得たり」と二度目のそれは当て字の漢字が異なっているのです。最初の「えたり」は「得有」ですが、二度目は「衣多利」です。これらはでたらめな「当て字」ではないと思います。現代の訓みがどこまで当時の「よみ」を正確に再現しているかも問題でしょうし、「衣多利」も実際に鎌足が使用した「当て字」なのかも問題でしょう。しかし、いずれにせよ、「当て字」システムを使用することにより、文字表現では表現できない当時の口頭表現のリアルさと、文字化させるときの工夫とが入り混じって古代日本語の豊かさと直情さと感じ取れるではありませんか。

3. 日本語の特徴

和歌は漢字導入以前から歌われていたと思います。漢字導入により消失を免れた和歌が万葉集です。ですから、万葉集は当時の人々のしゃべり言葉の「5・7・5・7・7」ということになります。「5・7・5・7・7」に持ち込まねばならない形式上の拘束がありますから完全なしゃべり言葉そのものではないでしょう。しかし、肝心な部分は表現の最後に持ってくるという傾向は既に万葉集にあります。英語を日本語に翻訳するときに、頻繁に文章全体を転倒させねばならないことが生じます。日本語にするためには、英語では最初に置かれていた主な部分が最後になるとか、後続する because 節を最初に持ってくるとかです。極端に言えば日本語は前置きの長い表現スタイルと言えるでしょう。